



TITLE:

# 貿易商品の集中性と分散性 (新年特別號)

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. 貿易商品の集中性と分散性 (新年特別號). 經濟論叢 1936, 42(1): 324-344

ISSUE DATE:

1936-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130716>

RIGHT:

大正四年六月二十一日第三編出版部可（毎月一回一日發行）

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第

卷二十四第

行發日一月一年一十和昭

## 新年特別號

恩給年金賞與の課税.....	法學博士 神戶正雄
經濟社會學の概念.....	文學博士 米田庄太郎
費用としての勢力.....	文學博士 高田保馬
幕末諸藩の開國思想.....	經濟學博士 本庄榮治郎
經濟學史の基本問題.....	經濟學博士 石川興二
產繭處理問題.....	經濟學博士 八木芳之助
表式調査に就いて.....	經濟學博士 蜷川虎三
戰前戰後の獨逸社會事業.....	經濟學士 中川與之助
原料仕入に於ける基本問題.....	經濟學士 大塚一朗
利潤論の修正.....	經濟學士 柴田敬
支那の幣制改革と其の意義.....	經濟學士 松岡孝兒
日本資本主義成立過程の一考察.....	經濟學士 堀江保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量.....	經濟學士 中谷實
再保險の發展と保險企業結合.....	經濟學士 佐波宜平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解.....	經濟學士 白杉庄一郎
商業機能學說の發展.....	經濟學士 堀新一
臺灣の酒專賣.....	經濟學博士 汐見三郎
國民主義者の私企業觀.....	經濟學博士 作田莊一
植民地再分配論の種々相に就て.....	法學博士 山本美越乃
貿易商品の集中性と分散性.....	經濟學博士 谷口吉彦
我が國の銀行預金.....	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題.....	

（纂 轉 載）

## 貿易商品の集中性と分散性

谷 口 吉 彦

### 目次

一、貿易の集中性と分散性

二、主要貿易品の分散度

三、分散度の國際的比較

四、個別貿易の集中性

五、分散度の歴史的發展

六、結 論

### 一、貿易の集中性と分散性

一國の外國貿易が集中的であるか分散的であるかといふ問題は、種々の意味において問題となりうるし、また何れの意味においても、理論上・政策上にそれ／＼興味ある重要な意義を有するものである。

第一に、貿易の集中性および分散性は、先づ地理的の意味において問題となる。地理的集中性と地理的分散性は、言ふまでもなく一國の貿易が少數國との間に集中的に行はるか、または多數國との間に分散的に行はるかの問題である。理論的には、何れの國でも最初の貿易は、地理的に接近せる國との間に先づ成立し、次第に經濟的發展をなすと共に、貿易の地理的範圍を擴大すると考へられる。たゞ近世貿易の成立および發展には、地理的條件よりも寧ろ經濟的條件が支配的要素となり、資本主義的先進國と後進國との貿易が、却つて地理的遠隔の地において集中的

に行はるゝこととなるが、併しこの場合と雖も、貿易の地理的範圍が次第に擴大することは同様である。即ち一般には貿易の發展傾向は、地理的集中から分散に向つて進むものであるといふことが理論的に考へられる。このことは政策上より見るもまた重要である。貿易が少數國との間に集中してゐることは、經濟變動上より來る種々の危險を集中することとなり、危險分散主義の原理に違反するからである。最近問題となりつゝあるブロック經濟主義は、即ちかくの如き貿易の分散的傾向に對して、之を政治的に統制して、一定範圍の集中性を維持せしめんとする運動であると言ふことが出来る。吾國の輸出貿易が最近數年來、謂はゆる新市場に向つて著しく進出しつゝあるのは、即ち地理的分散に向つて發展しつゝあるものであつて、貿易政策上より見て重要な意義を有するものである。何れにせよ貿易の集中性と分散性とは、まづ第一に、地理的または國際的の意味において問題となることは明らかである。

第二に、貿易の集中性と分散性とはまた、企業的の意味においても問題となる。謂はゆる企業集中の傾向が、今日の社會に全面的に進行するものならば、貿易企業においてもまた、次第に小規模から大規模への集中傾向が現はれる筈であるが、事實において果してこの傾向を認めることが出来るかどうか、吾國においては輸入貿易は著しく企業的に集中せられ、少數大商人の手によつて大量的の輸入が行はれつゝあるが、輸出貿易は之に比すれば比較的に分散せられ、多數の輸出商人によつて分業的に輸出せられつゝある。貿易企業が集中的であるか分散的であるかは、今

日問題となりつゝある貿易統制ことに組合組織による貿易統制と密接なる關係を有する。大規模の少數企業に集中する場合でも、普通には國內企業における程にはカルテル化の傾向は強くないけれども、特定商品の生産または價格が、輸入先において獨占化せる場合には、例へば吾國の輸入石油におけるが如く、カルテルの成立しうる可能性が強い。然るに吾が輸出業者におけるが如く企業の分散的な場合には、反對にその無謀なる競争のために、却つて輸出貿易を阻害することが多いから、こゝに組合組織の貿易統制を必要とするに至る。また貿易企業に特有なる問題として、企業の所屬すなはち一國の貿易が外國商人に集中するか、内外商人に分散するか、國內商人に集中するかの問題がある。一般的には後進國が先進國と接觸する場合には、輸出入ともに外國商館に集中されることが多い。然るにその國の經濟發展と共に次第に商權を回復して、總てを自國企業によつて輸出入することとなり、進んで後進國の商權にも進出して相手國の輸入商または國內商人となるに至る。かの蘭領印度における蘭商保護および邦商保護の問題は即ちこの段階に達せるものである。何れにせよ、貿易をその主體より見たる企業的の集中性および分散性は、また重要な問題を提供することは疑ひ得ない。最後に貿易企業に關聯して、更にその背後に存在する生産企業の集中性が分散性かの問題がある。之は一般的には國內企業の集中および分散の問題に包含せられるが、たゞ輸出品の生産過程および輸入品の消費される生産過程に關する問題として、特異の問題を構成することとなる。ことに輸出工業の集中的か分散的かは、組合統制に

關聯して、前述の輸出商業の統制と同じく重要な問題となる。一般には生産過程の集中的なる時は、配給過程もまた集中的となるが、前者の分散的なる時は、必ずしも後者は分散的とは限らない。たゞ後者の分散的なるときは、一般に生産過程もまた分散的である。わが輸出商業が前述の如く比較的に分散的であるのは、輸出工業がまだ一般に著しく集中されてゐない證據である。こゝに配給過程と生産過程との密接なる關係がある。配給または貿易上に現はるゝ現象形態は、國內經濟または生産過程の對外的表現に外ならぬからである。

第三に、貿易の集中的か分散的かはまた、時間的の意味においても問題となる。時間的に集中するか分散するかは、謂はゆる貿易の季節的變動として、早くより問題となつてゐる。吾國の貿易は、前半期における輸入の集中性と、後半期における輸出の集中性とを現はし、これがまた爲替決濟上にも國際收支上にも重要な影響を齎らしつゝある。この時間的集中は主として後述の商品的集中の結果であるから、商品分散性の強まると共に、次第に薄らぐものであるが、何れにせよ、時間的集中および分散の原因・結果・程度・發展等々が、また一つの問題となりうることも言ふまでもない。

第四に、商品の種類より見たる貿易の集中性と分散性とは、最も普通の意味において問題となる。一國の貿易品が少數の商品に集中されるか、多數の商品に分散されるかは、貿易そのものの構成より見るも、國民經濟そのものの構成より見るも、重要な問題である。國民經濟の發展の

初期にあつては、その内部構成の單純なるために、貿易商品もまた集中的となるが、その發展段階の進むに従つて、次第に分散的となる傾向をもつであらうと考へられる。即ち理論的には一般に集中的から分散的への發展が考へられる。また政策的にも、一國の貿易が少數商品に集中することは、多數商品に分散する場合に比して、謂はゆる危險分散主義に遠ざかるわけである。

かくの如く貿易一般の集中性と分散性とは、地理的または國際的にも企業的にも時間的にも商品的にも、それ々の意味において問題となり、理論上、政策上にそれ々異なる意義を有するものである。併しながら本論においては、右のうち特に最後の商品的集中性と分散性のみを問題とし、その他の問題は之を他の機會にゆづることとする。貿易商品の集中性と分散性と題する所以はこゝにある。

## 二、主要貿易品の分散度

一國の貿易が多數商品に集中するか、少數商品に分散するかは、要するに相對的問題であり、比較的問題である。そこで集中または分散の程度を測定する必要を生ずるが、茲で試みに用ひた方法は、輸出または輸入の總額に對する主要輸出入品の百分比を算出し、その集中または分散の程度を觀察する方法によつた。蓋し輸出商品が極端に集中的なる場合は、たゞ一種の輸出品をもつて輸出總額の一〇〇%を占むる場合であり、之れが次第に分散的となるに従つて、この歩

第一表 主要輸出品の分散度

貿易商品の集中性と分散性

	生絲	綿織物	絹織物	絹織物	罐詰食品	プラスチック製品	陶磁器	小麥粉	鐵類	玩具	計
	%	%		%	%	%	%	%	%	%	%
大正14	38.2	18.8	—	5.1	0.6	1.3	1.5	0.6	0.3	0.5	66.9
15	35.9	20.4	—	6.5	0.8	1.3	1.6	0.8	0.2	0.5	68.0
昭和2	34.4	19.2	—	7.0	1.0	1.5	1.5	0.7	0.2	0.5	66.0
3	37.2	17.9	—	6.8	1.2	1.7	1.8	1.3	0.2	0.6	68.7
4	36.3	19.2	—	7.0	1.2	1.7	1.7	1.2	0.2	0.6	69.1
5	28.4	18.5	—	6.9	1.5	2.1	1.8	1.0	0.6	0.8	61.6
6	31.0	17.3	—	7.2	1.7	1.8	1.7	0.8	0.6	0.9	63.0
7	27.1	20.5	4.3	3.6	1.6	1.9	1.6	1.5	0.8	1.1	61.0
8	21.0	20.6	4.2	3.4	2.5	2.3	1.9	1.9	1.8	1.4	61.0
9	13.2	22.7	5.2	3.6	2.3	2.2	1.9	1.3	2.4	1.4	66.2
十ヶ年平均	30.3	19.5		7.1	1.4	1.8	1.7	1.1	0.7	0.8	64.2
三ヶ年平均	20.1	21.3	4.6	3.5	2.1	2.1	1.8	1.6	1.7	1.3	59.4
	鐵製品	機械及 部分品	木材	紙類	綿織絲	精糖	石炭	毛織物	水産物	屑絲及 眞綿	計
大正14	0.6	0.4	0.9	0.9	5.3	1.4	1.4	0.2	1.0	1.3	13.4
15	0.6	0.4	0.9	0.9	3.5	1.7	1.5	0.2	1.1	0.8	11.6
昭和2	0.6	0.6	0.8	1.0	1.9	1.5	1.3	0.1	1.0	0.6	9.4
3	0.7	0.5	0.9	1.3	1.3	1.9	1.2	0.2	0.9	0.6	9.5
4	0.7	0.6	1.0	1.2	1.2	1.4	1.1	0.2	1.0	0.6	9.0
5	1.0	0.9	1.0	1.9	1.0	1.8	1.5	0.2	1.2	0.4	10.9
6	0.9	1.2	0.9	1.8	0.7	1.3	1.3	0.1	0.9	0.2	9.5
7	1.0	0.8	0.8	1.0	1.5	0.5	1.0	0.3	0.6	0.1	7.6
8	1.4	1.4	1.0	1.0	0.8	0.8	0.8	0.7	0.6	0.1	8.6
9	1.6	2.7	1.1	1.0	1.1	0.6	0.5	1.4	0.7	0.1	10.8
十ヶ年平均	0.9	1.0	0.9	1.2	1.8	1.3	1.2	0.4	0.9	0.5	10.0
三ヶ年平均	1.3	1.6	1.0	1.0	1.1	0.6	0.8	0.8	0.6	0.1	9.0



合は低下して、最も極端に分散的なる場合は多數の輸出品に均等の歩合をもつて分割されるであらう。輸出品についても全く同様である。かくしてこの方法によつて先づ最近十年間の主要なる吾が輸出品の歩合を算出せば、第一表の如き結果を得る。

これは主要輸出品二十種の間における分散度を見たものであるが、最近十ヶ年平均において、上段の十種輸出品の占むる割合は、六四・二%を示し、下段の十種輸出品では一〇・〇%を示してゐる。即ち吾國の輸出の六割四分までは、僅かに十種の主要輸出品をもつて占められてゐる。更にその中の二種商品(生絲・綿織物)をもつて四九・八%を占めてゐる。即ち吾國の輸出のほぼ半分は、僅かに二種の商品で獨占されてゐる。之は恐らく輸出集中性の最も著しい一例であらう。

然るに最近十ヶ年平均と三ヶ年平均とを比較するに、右の二種商品では四一・四%に減退し、上段の十種商品では五九・四%に減退し、下段の十種商品でも九%に低下してゐる。即ちこゝで一般的に認められることは、最近における是等の諸商品の割合の低下であり、之は輸出商品の分散度の増加を意味するものである。

主要輸出品の個々について前表を觀察するとき、各商品の相對的地位の動きが明らかに看取される。例へば生絲は十年前の三八・二%から、最近の一三・二%に低落し、罐頭詰食料品は〇・六%から二・三%に増進せるが如き是である。

次に主要輸入品について同じ方法を用ひて第二表を得る。

第二表 主要輸入品の分散度

貿易商品の集中性と分散性

	棉花	羊毛	鐵類	機械及 部分品	豆類	小麥	油槽	木材	石炭	鑛油	計
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
大正14	35.9	4.7	3.9	3.5	2.7	2.7	4.2	3.0	0.9	1.2	62.7
15	30.5	3.6	5.2	3.8	2.6	3.9	5.2	4.4	1.2	1.3	61.7
昭和2	28.7	4.7	6.2	3.3	2.4	2.5	4.5	4.8	1.6	1.6	60.3
3	25.0	5.1	6.8	3.9	2.1	3.1	4.0	5.1	1.7	1.7	59.5
4	25.9	4.6	7.2	5.1	3.6	3.2	3.4	4.0	1.9	1.7	60.6
5	23.4	4.8	6.1	5.3	3.2	2.7	4.3	3.4	2.2	2.5	57.9
6	24.0	7.0	3.9	3.9	3.0	2.7	3.6	3.5	2.3	3.0	56.9
7	31.3	6.1	4.5	4.1	2.9	3.5	2.4	2.4	1.9	2.6	61.7
8	31.6	8.6	7.2	3.7	2.6	2.3	2.1	2.1	1.9	1.8	63.9
9	32.0	8.2	7.5	4.2	2.3	1.9	1.8	1.8	2.1	1.5	63.3
十ヶ年平均	28.8	5.7	5.9	4.1	2.8	2.9	3.6	3.5	1.8	1.9	61.0
三ヶ年平均	31.6	7.6	6.4	4.0	2.6	2.6	2.1	2.1	2.0	2.0	63.0
	生ゴム	製紙用 パルプ	採油用 原料	植物 纖維	鑛	自動車 及 部分品	砂糖	組製硫酸 アンモニ ウム	毛織物	毛織絲	計
大正14	1.3	0.6	0.9	1.1	0.5	0.5	2.9	1.3	2.2	2.2	13.5
15	1.7	0.5	1.2	1.1	0.4	0.7	3.5	1.9	1.2	1.4	13.6
昭和2	1.6	0.5	0.9	1.2	0.6	0.8	3.5	1.5	1.6	2.0	14.2
3	1.3	0.5	1.0	1.3	0.9	1.5	2.9	1.7	1.4	1.5	14.0
4	1.5	0.6	1.4	1.3	1.2	1.5	1.4	2.2	0.9	0.8	12.8
5	1.2	0.8	1.3	1.0	1.5	1.3	1.7	1.9	0.7	0.9	12.3
6	1.1	1.0	1.2	1.1	1.2	1.3	1.3	1.3	0.8	1.0	11.3
7	1.1	1.1	1.0	1.2	1.2	1.4	0.2	0.5	0.7	0.4	8.8
8	1.6	1.4	1.2	1.2	1.2	0.7	0.7	0.5	0.4	0.2	9.1
9	2.5	1.9	1.1	1.2	1.2	1.4	0.4	0.6	0.2	0.7	11.2
十ヶ年平均	1.5	0.9	1.1	1.2	1.0	1.1	1.9	1.3	1.0	1.1	12.1
三ヶ年平均	1.7	1.5	1.1	1.2	1.2	1.2	0.4	0.5	0.4	0.4	9.6

之によれば最近十ヶ年平均において、上段の十種商品では六一・〇%を示して前表に比しやゝ低く、下段の十種商品では一二・一%を示して稍々高い。之によつて輸入商品の分散度は、輸出商品に比べて稍々高きことがわかる。これはまた最初の二三の主要商品についても言へる。即ち輸入商品では輸出商品ほどには、少數商品への集中性はない。たゞ最初の棉花については、ほゞ同じ程度の集中性が見られる。

然るに十ヶ年平均と三ヶ年平均との比較においては、輸出の場合とは逆に、却つて上段の商品割合は増加し、下段の商品割合は減少して、こゝでは反對に集中性への傾向が看取される。これは最初の二三種の商品において特に著しく現れてゐる現象である。個々の商品についてもそれぞれの變化があり、例へば羊毛・鐵類の遞増傾向、砂糖・毛織物の遞減傾向が認められる。

### 三、分散度の國際的比較

貿易商品の分散的か集中的かは、相對的または比較的問題である。この相對性は、第一に歴史的發展の意味において、即ち時間的の相對性において問題となる。これは後に問題とする。第二に國際的比較の意味において、即ち空間的の相對性において問題となる。こゝに問題とするのは、この意味における相對性である。

この場合にもまた各國の歴史性が問題となるが、こゝでは姑らく之を別として、たゞ現段階に

おける現象形態を問題とするが、而かもこの場合にも少くとも偶然的要素を排除する意味において、各國の平均型を發見し、それについての國際的比較を行ふべきである。併しながらこゝでは資料の關係上、たゞ特定の年を採つて、かりに比較を試みるこゝとする。いま一九三三年の英・米・獨・佛四ヶ國の主要輸出品について、前に述べたと同じ方法を試みて、各商品の百分率を算出し、之を同じ年の吾國のそれと對照せしむるときは第三表を得る。簡單ならしむるために商品種名を省略して番號をもつて表示する。

第三表 輸出分散度の國際的比較 (一九三三年)

商品番號	英國 %	米國 %	獨逸 %	佛國 %	日本 %
1	11.4	24.2	14.5	9.6	21.0
2	11.0	12.1	11.5	7.1	20.6
3	8.6	8.0	11.2	5.3	4.2
4	7.4	5.5	9.0	5.2	3.4
5	6.9	5.1	8.2	4.7	2.5
6	5.9	4.7	5.5	4.4	2.3
7	4.8	4.2	4.5	4.3	1.9
8	4.0	3.8	4.2	4.0	1.9
9	2.9	2.8	3.2	3.7	1.8
10	2.7	2.5	2.6	2.6	1.4
計	65.6	72.9	74.4	50.9	61.0
11	2.4	2.4	2.5	2.6	1.4
12	1.9	1.9	2.1	2.2	1.4
13	1.9	1.5	1.8	2.0	1.0
14	1.7	1.1	1.8	1.9	1.0
15	1.7	1.1	1.7	1.8	0.8
16	1.3	0.9	1.5	1.6	0.8
17	1.1	0.9	1.5	1.6	0.8
18	1.0	0.9	1.4	1.5	0.7
19	1.0	0.8	1.3	1.2	0.6
20	1.0	0.2	1.2	1.0	0.1
計	15.0	11.7	16.8	17.4	8.6
合計	80.6	84.6	91.2	68.3	69.6

各國輸出商品の分散度または集中度には、それぐに著しき相違あることは、この表によつて

明らかである。先づ最初の十種商品について見るに、獨逸の集中性と佛國の分散性とが最も著しく對照される。即ち獨逸においては輸出の七四・四%までは最初の十種商品によつて占めらるゝに反し、佛國においてはそれは五〇・九%を占めるに過ぎない。吾國は佛國に次いで比較的分散性に富んでゐる。併しながら之を更に數種の商品について見る時は、米國の輸出棉花は二四・二%を占めて最も集中的であるが、吾國の生絲と綿織物もまた著しく集中的であつて、この二種商品をもつて四一・六%を占め、この點では最も集中的である。下段の十種商品を加ふる時も、獨逸は最も集中的であつて九一・二%を占め、吾國は佛國と共に比較的に分散的である。

次に各國の輸入商品について同様の方法を適用して第四表を得る。

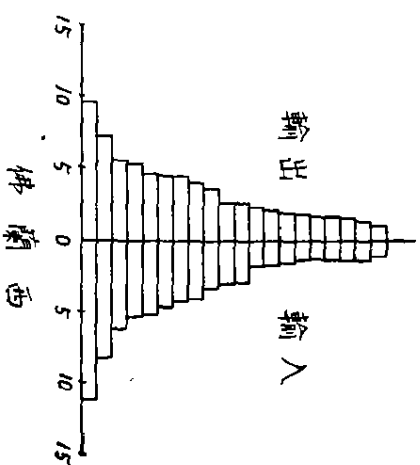
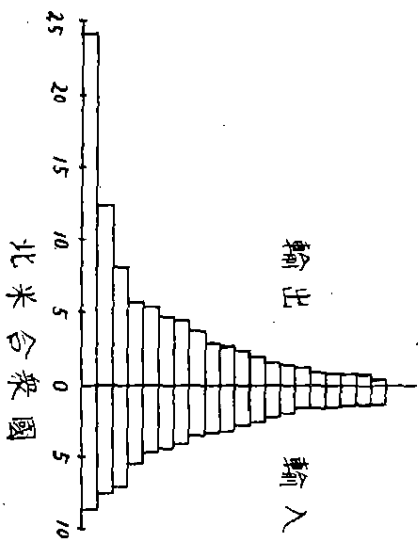
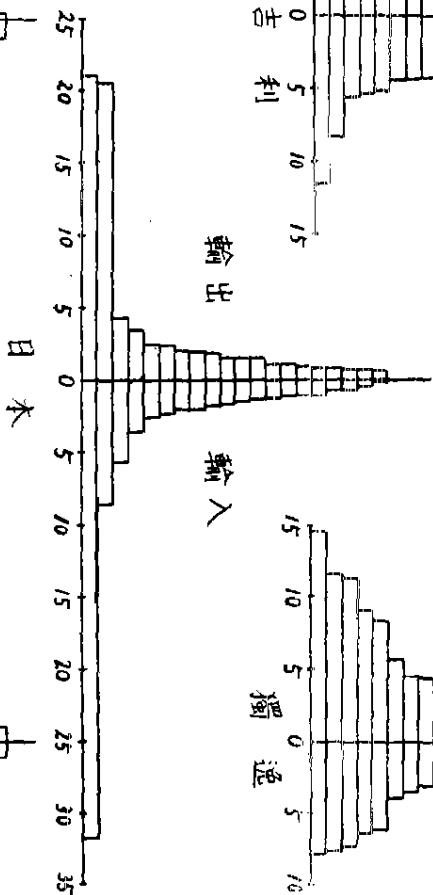
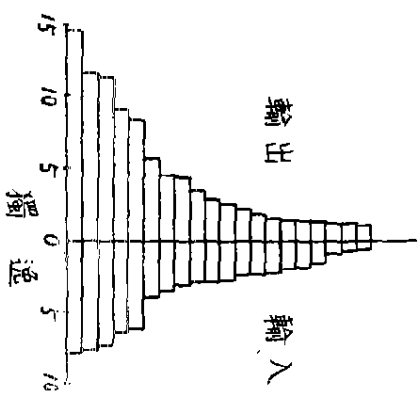
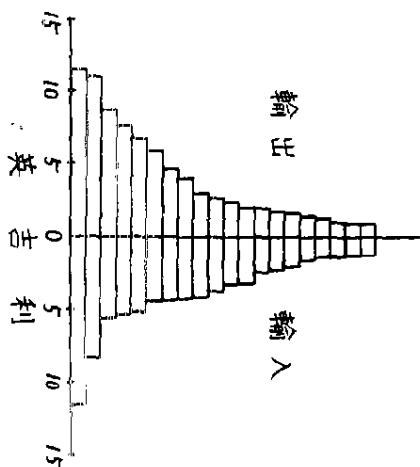
第四表 輸入分散度の國際的比較 (一九三三年)

商品番號	英國	米國	獨逸	佛國	日本
1	11.5%	8.6%	7.3%	11.1%	31.6%
2	8.1	7.4	7.2	8.3	8.6
3	5.5	7.1	6.7	6.1	7.2
4	5.4	5.3	6.4	5.5	3.7
5	5.1	4.7	6.3	5.4	2.6
6	4.6	4.5	3.9	4.7	2.3
7	4.5	4.1	3.7	4.3	2.1
8	4.4	3.5	3.0	4.1	2.1
9	4.3	3.2	2.9	3.3	1.9
10	3.7	3.2	2.8	3.1	1.8
計	57.1	51.6	50.2	55.9	63.9
11	3.2	2.6	2.7	3.0	1.6
12	3.1	2.6	2.4	2.0	1.4
13	2.3	2.2	2.1	2.0	1.4
14	2.2	2.1	2.1	1.7	1.2
15	2.1	1.8	1.7	1.6	1.2
16	1.7	1.8	1.6	1.5	1.2
17	1.5	1.7	1.4	1.4	0.7
18	1.4	1.6	1.1	1.4	0.7
19	1.4	1.5	0.8	1.4	0.5
20	1.4	1.5	0.6	1.2	0.2
計	20.3	19.4	16.5	17.2	10.1
合計	77.4	71.0	66.7	73.1	72.6

輸入商品の集中度は輸出の場合と異り、最初の十種商品では吾國において最大の六三・九%、獨逸において最少の五〇・二%を示してゐる。數種の商品についても同様である。然るに下段の十種商品を加ふる時は、英國において最大の七七・四%、獨逸において最少の六六・七%を示し、吾國は中間の地位にゐる。之は下段の十種商品のみにおいて吾國は最少の一〇・一%を占むるに過ぎないからである。

かくして各國との比較において吾國の有する特徴は、輸出において比較的分散性に富み、輸入において集中性に富んでゐる。何れの場合でも最初の二三の商品における集中性が特に顯著である。かくの如く商品範圍をどの程度に採るかによつて、問題は著しく相違する。例へば數種の商品を採用の場合と、上段の十種の商品を採用の場合と、下段の十種をも加ふる場合と、更にそれ以上の多數商品をも加ふる場合とによつて、集中または分散の程度を異にする。それ故に正確には右の二表をそのまゝに觀察する外ないわけであるが、便宜のために試みに之を次の圖表として觀察する。

この圖表によつて各國の集中または分散の状態を、具體的に觀察することが出来る。即ち吾國は輸出入ともに一二の商品に集中せる點において、他の何れの型とも相違する。フランスは輸出入ともにほぼ均整的に分散性が強い。たゞし輸入のみでは却つてドイツの分散性に劣つてゐる。アメリカは輸入の分散性に反して輸出は集中的である。



輸出入分散度の國際的比較

#### 四、個別貿易の集中性

一國の輸出または輸入を全體として、その分散度または集中度を問題として來たが、之を更に貿易相手國別に見て、特定の相手國への輸出または輸入は、商品的に見て如何なる程度に集中的か分散的かの問題がある。これは結局は二つの國民經濟の内部構造における相對的な關係に依存し、その現象形態として現はるゝものであるから、前の貿易全體の場合に比して、著しく集中的でなければならぬ。

先づ吾國の輸出貿易が、輸出先の國別に見て如何に集中されつゝあるかを見るために、主要輸出先十ヶ國（全輸出の七四・九%を占める）を採り、それらの諸國への輸出額に對する主要商品の百分率を算出して第五表を得る。嚴密には少くとも數年間の平均狀態または正常狀態を採るべきであるが、こゝでは假りに昭和九年について見るこゝとする。各國名の下にある括弧内の數字は、總輸出額に對するその國への輸出の百分率である。

第五表によりて輸出商品の集中度は、輸出先の國別によりて著しく相違することが判る。先づ十種商品の合計について見るも、最大の集中度を示せるは埃及であつて、埃及への輸出の八七・八%は十種の商品によつて占められる。之に次ぐは濠洲・北米合衆國・蘭領印度等である。反對に分散度の最大なるは關東州であつて、十種商品にて僅かに三九・六%を占めるに過ぎない。之に次



第五表 國別輸出貿易の集中度 (昭和九年)

商品 番號	北米合衆國 (18.4)	關 東 州 (13.6)	英 領 印 度 (11.0)	蘭 領 印 度 (7.3)	中 華 民 國 (5.4)
1	60.2	13.2	12.3	33.7	8.3
2	3.6	6.3	11.1	11.6	6.0
3	2.8	3.9	9.4	8.3	5.7
4	2.4	3.4	8.4	7.1	5.3
5	2.2	2.8	4.7	3.2	4.2
6	1.7	2.6	4.2	2.7	4.0
7	1.3	2.3	3.5	2.1	3.8
8	1.2	2.1	3.5	2.0	2.5
9	1.2	1.6	2.3	1.2	2.3
10	1.1	1.4	2.1	1.1	1.7
計	77.7	39.6	62.0	73.0	43.8
商品 番號	英 吉 利 (5.0)	滿 洲 國 (4.9)	埃 及 (3.4)	濠 洲 (3.0)	海 峽 植 民 地 (2.9)
1	22.7	26.2	42.6	26.5	19.7
2	13.1	9.6	13.2	13.8	5.6
3	9.7	7.5	11.2	10.9	5.4
4	7.0	3.4	9.4	9.6	5.3
5	5.7	3.1	5.0	6.3	4.2
6	4.7	2.2	4.2	3.6	4.0
7	4.2	1.9	0.9	2.8	3.6
8	1.6	1.8	0.7	2.6	2.6
9	1.1	1.8	0.3	1.3	2.1
10	1.0	1.7	0.3	1.2	2.0
計	70.8	59.2	87.8	78.6	58.5

ぐは中華民國・滿洲國等である。更に之を一二の商品について見るに、北米合衆國への一商品即ち生絲の六〇・二%、埃及への綿布四二・六%、蘭領印度への綿布三三・七%等は著しき集中性を示せるものである。中華民國・關東州・英領印度の如きは、この點でも著しき分散性を示してゐる。次に同様の計算を輸入商品について試みる時は第六表の結果を得る。

之によりて先づ十種商品の集中度を見るに、英領印度・濠洲を最大とし、何れも九〇%以上を占める。即ち前の輸出商品に比し輸入商品は著しく集中的である。比較的に分散的なるは中華民國・英吉利であるが、こゝでも尙ほ五〇%以上を占めてゐる。更に之を一二の商品について見るも、

第六表 國別輸入貿易の集中度 (昭和九年)

商品番號	北米合衆國 (33.7)	英領印度 (12.7)	濠洲 (8.7)	滿洲國 (7.2)	中華民國 (5.3)
1	% 52.0	% 87.4	% 80.8	% 29.0	% 13.2
2	8.8	2.5	11.2	19.0	9.4
3	4.6	1.7	1.3	18.6	8.5
4	4.1	1.1	1.2	11.6	7.3
5	3.4	1.0	0.5	6.4	5.7
6	2.5	0.8	0.3	0.4	5.7
7	2.1	0.5	0.1	0.3	5.2
8	1.3	0.4	—	0.2	4.6
9	1.3	0.2	—	0.1	4.2
10	0.9	0.1	—	—	2.3
計	81.0	95.7	95.4	85.6	56.1
商品番號	獨逸 (4.8)	英吉利 (3.1)	蘭領印度 (2.8)	海峽植民地 (2.8)	加奈陀 (2.4)
1	% 22.7	% 22.7	% 29.2	% 60.0	% 17.5
2	21.7	16.6	22.8	16.8	15.0
3	10.7	7.2	15.3	13.9	13.7
4	5.5	3.1	3.4	—	13.4
5	0.8	2.6	3.3	—	8.5
6	0.3	2.4	0.9	—	6.3
7	0.3	1.3	0.5	—	0.5
8	0.1	1.1	0.3	—	0.1
9	0.1	0.3	—	—	—
10	—	—	—	—	—
計	72.2	57.3	75.7	90.7	75.0

輸出の場合に比し著しく集中的であつて、英領印度よりの棉花八七・四%、濠洲よりの羊毛八〇・八%を最大とする。是等の諸國よりの輸入は僅かに二三の商品をもつてその九〇%以上を占めつゝある。要するに國別商品的の集中性は、輸入においてより大であり、また輸出入ともに相手國によつて著しき相違あることが判る。

## 五、貿易集中性の歴史的發展

一國の國民經濟が歴史的に發展する場合には、たゞに量的に増大するのみならず、その質的構

成を次第に變化せしむることと言ふまでもない。その結果は必然にその國の貿易構成を變化せしむることとなる。その一つは即ち本論において問題とする貿易商品の集中または分散の歴史的發展となつて現はれねばならぬ。

吾國の貿易について試みにこの意味における歴史的發展を見るために、明治元年以降毎十年の主要輸出入品各々十種をとり、それらの全額に對する各商品の百分率を算出することとした。この場合にも嚴密には各時代の平均または正常狀態を採るべきではあるが、こゝでは便宜上たゞ毎十年の輸出入を採ることとする。第七表は即ちその結果である。

第七表について先づ輸出主要商品を見るに、十種商品の合計は明治元年の七一・八%より漸減して大正六年の四八・六%に及び、昭和二年および九年は却つて増大してゐる。この傾向は最初の一二の商品についてもほぼ同様に認めらるゝ所であつて、明治初年には生絲四一・三%、製茶二四・八%、兩者にて全輸出の六六・一%を占むる程に集中的であつたが、生絲の比率は昭和二年を除いては著しく減退して、昭和九年の一三・二%にまで落込んでゐる。製茶の比率は更に著しく減退して、明治三十年には第四位の四・四%、四十年には第六位二・七%、大正六年には第十位の一・三%となり、昭和二年以後には遂に重要商品から落脱してゐる。之に反して明治四十年の第四位三・五%として始めて現はれた綿織物は、大正六年には第二位七・五%、昭和二年には一九・二%となり、昭和九年には第一位二三・七%に累進してゐる。輸出全體としては、昭和二年の如き例外を除け

第七表 貿易集中度の歴史的発展

	商品番號	明治元年	明治十年	明治二十年	明治三十年	明治四十年	大正六年	昭和二年	昭和九年
輸出主要商品	1	41.3	41.2	27.0	31.3	25.2	21.4	34.4	22.7
	2	24.8	18.7	14.9	7.6	6.5	7.5	19.2	13.2
	3	3.2	9.7	5.3	6.5	4.1	6.4	7.0	8.8
	4	0.9	5.5	4.5	4.4	3.5	3.7	1.9	2.7
	5	0.5	3.1	4.3	3.5	2.0	2.0	1.5	2.4
	6	0.5	1.8	4.3	3.2	2.7	1.6	1.5	2.3
	7	0.3	1.0	2.5	2.2	2.0	1.6	1.5	2.2
	8	0.2	0.5	2.2	1.9	1.7	1.6	1.3	1.9
	9	0.1	0.1	2.2	1.8	1.6	1.5	1.0	1.6
	10	—	—	1.8	1.8	1.4	1.3	1.0	1.4
計		71.8	81.6	69.0	64.2	51.6	48.6	70.3	59.2
輸入主要商品	1	22.9	17.7	13.0	15.9	22.4	29.9	28.7	32.0
	2	18.2	15.3	10.2	7.9	6.7	15.9	10.3	8.2
	3	8.6	10.5	7.6	7.3	6.0	5.1	4.8	7.5
	4	4.0	3.3	4.2	5.0	4.1	4.7	4.7	4.2
	5	3.9	2.2	3.2	3.5	3.9	2.7	4.5	2.5
	6	1.4	1.5	2.1	3.5	2.8	2.3	3.6	2.3
	7	1.0	1.5	1.9	2.9	2.8	1.7	3.5	2.1
	8	0.8	1.4	1.8	2.8	2.4	1.6	3.3	1.9
	9	0.4	1.1	1.4	2.1	2.0	1.5	2.5	1.9
	10	0.3	0.9	1.0	1.9	1.6	1.2	2.4	1.8
計		61.5	55.4	46.4	52.8	54.7	66.6	68.3	64.4

ば、大體において集中から分散への傾向を認めうる様である。

然るに輸入商品の一般的傾向については、第七表下段の十種商品に關する限りでは、同様の傾

向は殆んど認められない。即ち明治元年の六一・五%から昭和九年の六四・四%まで、何れかと言へば寧ろ集中的傾向が認められる。この傾向は個々の商品についても略ぼ同様に認め得られる。即ち第一位の商品集中性は、大體において漸増傾向にある。たゞこの内容は變化してゐる。即ち明治初年の第一位二三・九%の綿織物は、明治十年には第二位の一五・三%となり、二十年には第三位の七・六%となり、三十年には第五位の三・五%なり、それ以後は脱落してゐるに反し、明治初年第五位三・九%の棉花は、明治三十年第一位一五・九%以後躍進して、昭和九年の三二・〇%に至つてゐる。この兩者の地位の顛倒は即ち國民經濟の構成變化を示すものゝ一つである。かくして嚴密には尙ほ詳細なる商品別の分析を要すべく、また構成變化は必ずしも右の如き集中または分散に限らるゝものではないが、何れにせよ輸入商品の一般的傾向が、輸出商品とは逆に却つて集中化傾向さへ示してゐることは、吾が國民經濟に内在する一つの特徴を示すものと言ふことが出来る。

## 六、結 論

貿易構成の變化は、それ自身においても一つの意義を有すると同時に、それはまた國民經濟の内部構成を反映する現象形態であるといふ意味において、また重要な意義を有するものである。而して貿易構成にもまた種々の意味における構成が問題となりうる。本論において問題とした貿

易商品の集中性または分散性の如きも、廣義における貿易構成の問題といふことが出来る。

われ／＼は先づ謂はゆる集中性または分散性にも、種々の内容のあることを明らかにして、國際的・時間的・企業のおよび商品的集中性または分散性が、それ／＼の意味において問題となるべきことを指摘し、次いで右のうち特に商品的の集中性または分散性が、理論上・政策上に如何なる意義を有するかを考へ、この見地より問題を限定して、吾國の貿易商品につき實證的検討を試みることにした。その結果より得られたる事實上の結論を要約すれば、

(一) 吾國の輸出においては、生絲・綿織物の二種商品にて四九・五%を占め、十種商品にて六四・二%、二十種商品にて七四・二%を占めて、可なり集中であるが、最近十年間に稍々分散への傾向が認められる。輸入においては棉花・羊毛にて三四・五%、十種商品にて六一・一%、二十種商品にて七三・一%を占め、輸出に比しやゝ分散的ではあるが、最近十年間の趨勢は却つて集中への傾向が認められる。

(二) これを世界的主要貿易國たる英・米・獨・佛と比較するときは、一、二種の商品については輸入とともに最も集中的であるが、十種商品では輸出は比較的分散的であるに反し、輸入は最も集中的である。二十種商品では、輸出において最も分散的な一つとなるが、輸入においては依然として集中的の方である。

(三) これを吾が主要貿易先の國別に見る時は、貿易全體の場合に比して著しく集中的となり、

十種商品にて七〇%以上を占める北米・蘭印に對し、四〇%程度の關東州・中華民國がある。之比すれば輸入は更に集中性に富み、十種商品にて九五%以上を占める英印・濠洲に對し、最も分散的な中華民國でさへ五〇%以上を占めてゐる。これらの事實は吾國の輸入貿易にとり最も注意を要する所である。

(四) これを明治初年以來の歴史的發展について見る時は、輸出商品については、大體において集中的から分散性への傾向を認めうるに反し、輸入商品については、この傾向を認められず、反つて集中化傾向さへ認められる。これは吾が國民經濟に内在する一つの特殊性を現はすものとして注意に値する。併しながら右の如き現實の認識が、理論上および政策上の如何なる結論に導きうるかの問題は、本論においては未だ觸れ得ざる所である。(二〇・二二・二〇)